

# 式 辞

日本人の心の象徴である桜が、いま、季節を忘れずに花を咲かせています。それを見るにつけ、今年ほど、どんなに厳しい冬を体験しようとも、確実に、万物の生命が芽吹く春がやってくることに、何かしら希望と勇気が与えられる気がしているのは、私ばかりではないはずです。希望のふくらむこの春の日を、長岡京市長小田豊様をはじめ、多くのご来賓、保護者の皆様とともに、新入生を無事に迎えることができますこと、ただただありがたい気持ちでいっぱいです。



122名の新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。

みなさんが入学した、この長岡第四中学校は、そのほとんどが長岡第五小学校、一校から入学してくる生徒で占められています。この乙訓では、ただ一つの小中一貫的な学校なのです。そのことを、いくつかの小学校が集まる中学校と比べて、マイナスのイメージで語る人がよくいます。生徒の人間関係が固定したままとか、友達関係が広がっていかないとか、そういうマイナスの指摘です。

しかし、決して私は、そうは思っていません。小学校から中学校への環境の変化は、これまでの人間関係を大きく変化させるものであり、その深まりや広がり、中学校に集まる小学校の数などは関係ないと思っています。現に、入学したみなさんは、この四中で、多くの先輩たちや、多くの先生方との新しい出会いが始まるのです。四中は、小さいがゆえに、質の高い出会いが待っていると信じています。

それに、出会いというものは、なにも他人ばかりではありません。みなさん自身が、三月の自分ではなく、四中の制服に腕を通した「新しい自分」に、いま、巡り会っていることも事実です。小学校の時によく遊んだ仲間ではなく、制服を着た中学生の新たな仲間と巡り会っていることもまた事実なのです。それに、一ヶ月もすれば、部活動で汗を流している、また「新しい自分」を発見することにもなります。夏休み前には、ちょっと中学校生活に馴染んできた「新しい自分」に出会うことになるのです。みなさんは、決して、狭い、固定した人間関係の中だけで生きていくわけではありません。

さらに言うなら、中学校では、決してうまくいくことばかりではありません。この先、勉強がはかどらずに投げやりになってしまう自分や、部活動でなかなか上達していかないで落

ち込んでしまう自分、そして、家族や友達とぶつかって、イライラしてしまういやな自分など、思春期まっただ中のみなさんが、「認めたくないような自分」「大嫌いな自分」に出会うのも中学校なのかもしれません。

しかし、そういう現実の自分から目を背けることなく、一回きりの人生の主人公である自分のことを大切に思って、上手に悩みながら、新しい、確かな自分との出会いをつくり出してってください。人間は、うまくいった成功体験よりも、むしろ挫折や逆境の体験のほうが、何を必要とするのかを学ぶ絶好の機会だと考えるからです。

ぜひ、この四中で、失敗を決して恐れずに、こころが折れそうになっても、くじけそうになっても、決してあきらめずに、未来と希望を捨てない人間になってください。そして、身近な仲間がくじけそうになった時、笑顔や元気を作り出せる人間であって欲しいとも願っています。大震災という厳しい現実を突きつけられている日本人に、いま強く求められているのが、復興と救援につながる強さと優しさだと信じるからです。

最後に、保護者の皆さんに申し上げます。

親子の絆にまさる人間関係はありません。決して選ぶことのできない親子の絆、誰も肩代わりできないその関係を尊く思いながら、保護者のみなさんにつながっていきたいと願っております。何かと不安定な中学時代です。そういう子どもたちにとって、かけがえのない環境は、家庭と学校が、わだかまりなくつながり合っていくことによって生まれると確信しています。職員一同、最善を尽くしてまいりますので、よろしくお願い申し上げます、私の式辞といたします。

平成23年4月11日

長岡京市立長岡第四中学校 校長 三輪 秀文